116

桜ヶ丘団地遺跡群（さくらがおかだんち）

（鹿児島市宇宿8丁目）

位置と環境

鹿児島市南部の，東側に錦江湾を望む舌状台地の東端部に立地する。遺跡の北側は比高差約70mの急峻な崖となっている。

調査の経緯

昭和45年～46年に本田道輝や中間研志らによって分布調査が行われ，縄文時代を中心とする遺物が採集されている。昭和60年以降は，鹿児島大学埋蔵文化財調査室によって，調査が行われている。

遺構と遺物

旧石器時代～縄文時代草創期の遺物と遺構

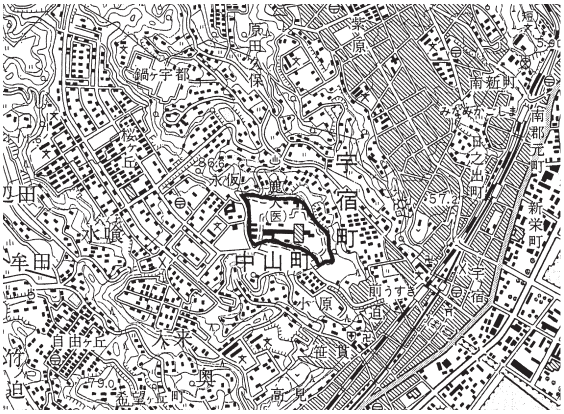
薩摩火山灰層の下から落し穴が4基確認されている。これらは，底面形が長方形で，開口部は幅70cm，長さ120cm，検出面からの深さは90cmほどの大きさである。底面は平坦で，数個の小ピットが認められる（写真1）。1個の落し穴の底面から1個の礫が出土したが，それ以外の出土品はなかった。

この時期の遺物は，瑪瑙製の石鏃が1点（第2図）と，細石刃が8点出土しているのみである。細石刃は，比較的まとまって出土した。遺物がいずれも狩猟道具で多量に出土しないことや，遺構も落し穴ということから，この時期は狩猟場で，住居などは別の地点にあったものと推定できる。

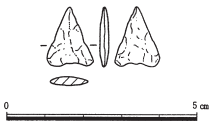
縄文時代時代（早期以降）の遺構と遺物

縄文時代の遺構は，薩摩火山灰層の上から住居跡1軒と，集石遺構1基，それから不定形な土坑が確認されている。住居跡は，隅丸方形の竪穴住居で，

写真1　薩摩火山灰層より下から検出された落し穴



第1図　桜ヶ丘団地遺跡群の位置



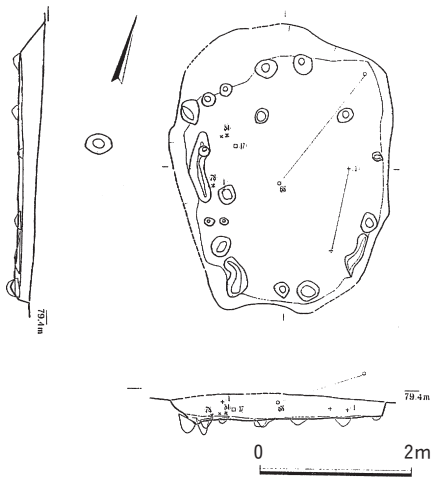
第2図　薩摩火山灰層より下から出土した石鏃

長径約3.5mである（第3図）。住居の床面周囲には，小さな柱穴が認められる。

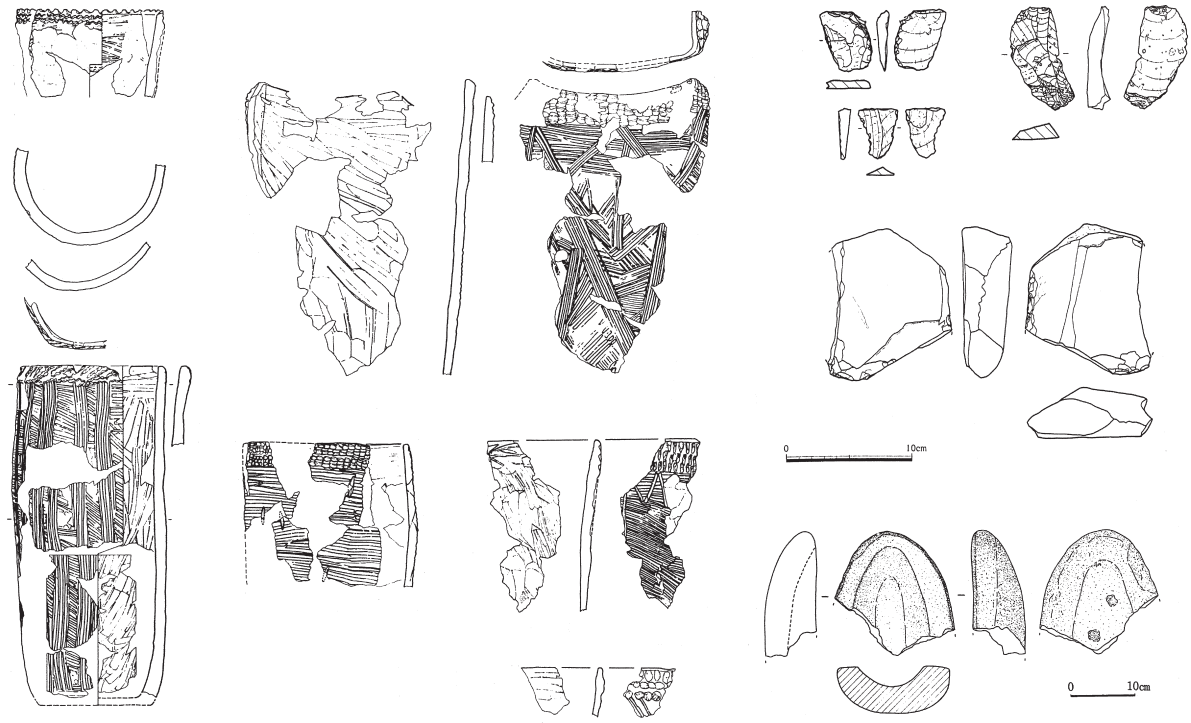
集石遺構は，少し掘り窪めた部分に礫が集められているのが確認された。礫は二次加熱によって赤変しているものもあったがまばらで，使用後崩したものと考えられる。

遺物は，岩本式・前平式土器を中心として早期の土器が出土している。そのほか，剥片石器，石鏃，石皿，くぼみ石が出土している（第5図）。薩摩火山灰とアカホヤ火山灰の間にその時期の遺物包含層がある。アカホヤ火山灰の中からも遺物が出土する。アカホヤより上の層から，縄文時代晩期の遺物が出土している。

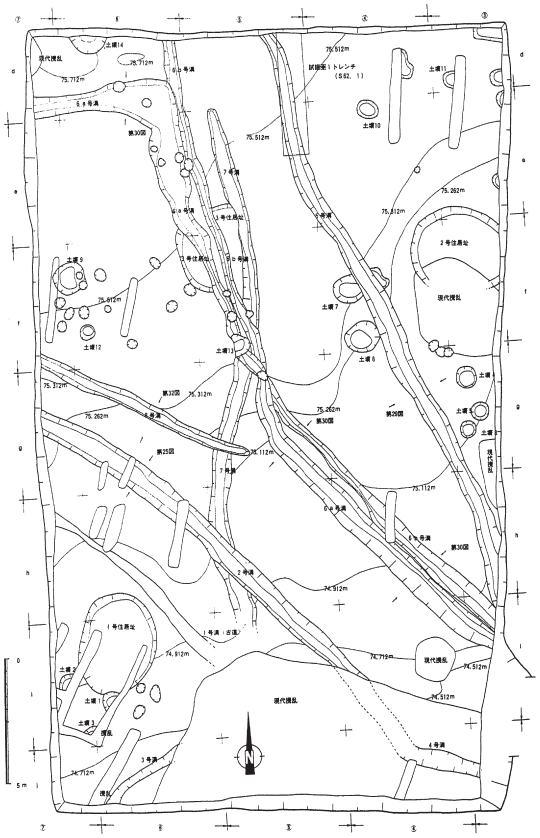
また，遺構ではないが，層位横転がアカホヤ火山



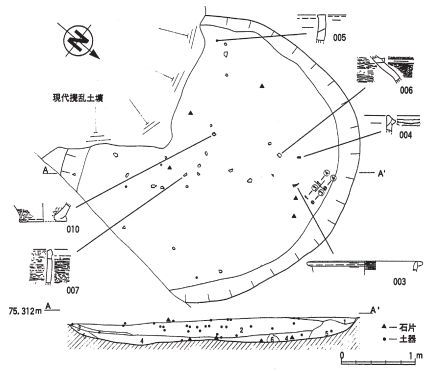
第3図　縄文時代早期の住居跡



第 4 図　縄文時代早期の遺物



第 5 図　弥生時代の遺構（住居跡は前期）



第 6 図　弥生時代の住居跡

灰の直上から多数検出される。アカホヤ火山灰から薩摩火山灰の上部の層までが横倒しになっているが，方向などは一定しない。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，前期から中期の住居跡群と貯蔵穴と考えられる土坑状遺構が確認されている（第 6 図）。また，終末期の住居跡と溝状遺構も確認されている。いずれも，竪穴住居で，平面形は円形を呈する。ひとつの住居床面からは，甕の口縁部を打ち欠き，縦割にした破片を上下，表裏逆に置いている状態の破片が出土した。おそらく，住居跡廃棄の際に置かれたものと考えられ，当時の風習を知る貴重な資料となっている。

遺物は，高橋式，中期前半の入来 1 式，入来 2 式，

中津野式土器などが出土している。その他の遺物は，土製の紡錘車，石鏃，碧玉製の管玉などがある。

特徴

約1.5mにもおよぶ深さの薩摩火山灰とアカホヤ火山灰によって明確に分けられる旧石器・縄文時代草創期と縄文時代早期，および弥生時代の考古資料が存在し，どれも遺構・遺物が伴うことから，人間活動の変遷を知ることができる遺跡となっている。また，本県でも稀な弥生時代前期の住居跡および遺物が確認されている。遺構の時期を中心に，縄文時代晩期から弥生時代中期前半まで途切れることなく遺物が出土しており，狩猟・採集生活中心の縄文時代から農耕生活中心の弥生時代への社会変化にどのように対応したのかを知る，台地上の遺跡としてのケースとなっている。

資料の所在

本田による分布調査での遺物は，本田が所蔵・管理を行っている。ほかは鹿児島大学に収蔵され，鹿児島大学埋蔵文化財調査室が管理している。

参考文献

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1987『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』II

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V1990

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1999『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』14

鹿児島大学埋蔵文化財調査室2001『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』16

（中村直子）